

## 究極の休み



安息日午後 9月18日

## 暗唱聖句

しかし、聖書に書いてあるとおり、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである。(1コリント2:9、口語訳)

しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。(1コリント2:9、新共同訳)

## 今週の聖句

黙示録1:9~19、マタイ24:4~8、23~31、黙示録14:6~12、ヘブライ11:13~16、フィリピ4:4~6

## 今週のテーマ

あなたは今までに、善と悪の間の大いなる闘いのただ中にいると感じたことがありますか。世の中の人々でさえ、その多くがこの現実を感じています。私たちがそう感じるのは、それが事実だからです。私たちは善と悪の、キリスト(善)とサタン(悪)の間の大いなる戦いの中に生きているのです。

人生は実に、この二者の間の闘いなのです。キリストとサタンの間の大争闘は地球規模で展開しています。事実、その始まりは天においてでしたから、宇宙レベルと言ってもいいでしょう(黙12:7)。しかし、混沌とした世の中にあって、私たちは、神がこの世界を救うためにお立てになった計画の全体像を見失いがちです。戦争、政治的緊張、そして自然災害は、私たちをどうしようもない恐怖に陥れます。しかし、神の預言のみ言葉は、私たちがどこに行こうとしているのか、そして、どのようにしてそこに行くのかという全体像を示してくれます。

大争闘は、個人的なレベルでも展開しています。私たちのだれもが、日々の生活の中で信仰の挑戦を受けています。もし私たちがイエスの再臨に向かって生きるのではないなら、私たちもまた死を待つのみです。今週私たちは、世界的な不安、そして私たち自身の未知の将来に直面しながら、少なくとも人生という短い区切りで見て、どのようにしてイエスの内に休むことができるかについて学びますが、長期的に見れば、それは実に希望に満ちたものになるのです。

イエスと実際に共に過ごした中で、最も高齢まで生き延びたその弟子は、彼の近しい者、愛する者たちすべてから引き離され、岩ばかりの島に流されました。孤島に取り残され、ヨハネの心にはどんな思いが去来したことでしょう。彼はどのようにして、こんな島まで来ることになったのでしょうか。最後に彼はイエスが天に上げられるのを見、2人の天使が、『「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる』』との言葉を語るのを聞いたのでした（使徒1:11）。

しかしながらそれは、ずっと以前の、何年も前のことでした。そしてイエスはまだ戻っては来られないのです。その間に、ほかの弟子たちは死に、その多くはイエスの証人として殉教していきました。まだ若い教会は世代交代し、外からは恐ろしい迫害が迫り、内側では異端運動に揺らいでいました。ヨハネは孤独と疲れと不安を感じていました。そのとき突然、彼は幻を見ます。

### 問1 この幻はヨハネにどのような慰めを与えたのでしょうか（黙1:9~19）。

イエスが弟子たちに言われた「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタ28:20）とのみ言葉は、間違いなく、孤独な流刑の身であったヨハネを勇気づけたことでしょう。すなわち、「アルファであり、オメガであり、初めであり、終わりである」イエスが今、この流刑の使徒に特別な方法でご自身を現されたのですから、このイエスの「黙示」である幻は、彼にとって大きな慰めとなったことでしょう。

これらの聖句に続く幻は、この世界の将来についてのものでした。彼の前に、おそるべき人類史のパノラマが映し出されました。今の私たちにとっては、それは過去のキリスト教会の歴史ですが、この時点のヨハネにとって、それは将来の出来事でした。そして、なおも彼に、来るべき試練と艱難の中で、それらの歴史がどのようにして終わるかがすべて示されたのでした。「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなりました。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た」（黙21:1、2）。

ヨハネが黙示録に書き残したこの大いなる終末の幻は、神の備えたもうものと、数々の約束のうちにある確かな休みを彼に与えたことでしょう。

現在、この世の人生は辛く、時には恐れに満たされることさえありますが、それでも、神が未来をご存じであり、長期的な目で見れば、その未来は良いものであると知ることは、私たちに今日のように慰めを与えてくれますか。

イエスはオリーブ山で弟子たちの質問に答えて、まるで大胆な筆遣いで絵を描くように、これから起ころうとする出来事について語られました。「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか」（マタ24：3）。

マタイ24章のイエスの有名な説教には、イエスの時代から再臨まで、そしてその後の出来事までが、途切れることなく時系列で描かれています。

イエスは、あらゆる時代の神の民に大まかな神の終末のための予定表を与え、終末に生きる人々がクライマックスに備えられるようにされたのです。主は、周りのすべてが崩壊しても、主の愛のうちに休むことを望んでおられるのです。

アドベンチストは、「その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が」（ダニ12：1）という聖句をよく知っています。イエスは私たちに、再臨に先立つこれらの出来事に備えるよう望んでおられます。

**問2 主はどのようにおいでになるのでしょうか。どうすれば惑わされないことができるのでしょうか（マタ24：4～8、23～31参照）。**

イエスの再臨は、文字通り終末に起きる出来事です。預言の中に、そしてイエスご自身の説教の中に、再臨はどれほど繰り返し言及されているか考えてみてください。これはもう預言の大盤振る舞いと言えます。

前回、この地上で世界規模の出来事が起きたとき、備えができていたのは、世界中にたった8人だけでした。イエスは再臨の意外性について、この出来事、すなわち洪水と対比させておられます（マタ24：37～39）。再臨の「その日、その時」はだれも知りませんが（同36節）、神は私たちに、世界に起きる状況を見てカウントダウンできるように、終末の出来事を予告してくださったのです。

**問3 私たちには、この預言的ドラマの中で果たすべき役割が与えられています。その役割とは何でしょうか（マタ24：9～14）。**

この宇宙的争闘の中で、私たちはもはや観客ではできません。私たちは、世界の果てまで福音を宣べ伝えるという役割を積極的に果たさねばなりません。そしてそれは、私たちもまた迫害に遭うことを意味します。

「最後まで耐え忍ぶ」とは、どういうことを意味しているのでしょうか。どのようにすればよいのでしょうか。落伍者にならないために、私たちは日々、どんな選択をする必要があるのでしょうか。

預言された歴史の全体像は、実際に起こる出来事をコントロールすることができないからと言って、その展開を私たちが傍観することを許しません。「終末の出来事は予言通りに起こるのですから、私たちは黙って見ているしかないでしょう。結局、私1人に何ができますか」というような声を耳にします。

しかし、このような態度は、私たちを取り巻く世界と、特に終末の出来事に対してクリスチャンが取るべき態度ではありません。黙示録14章は、私たちがこの人類史の最終時代に生きる目的は、神の裁きについて人々に語り、彼らをイエスの再臨に備えさせることであると告げています。

**問4 黙示録14：6～12を読んでください。これらの聖句は何を教えてください。私たちは世界に何を宣言すべきでしょうか。この使命はなぜ、それほど急がれるのでしょうか。**

私たちアドベンチストは、「現代の真理」(2ペトロ1：12、英訳聖書の直訳)は、私たちが「三天使のメッセージ」と呼ぶこれらの聖句の中に特に示されていると信じています。ここに、最終時代に生きる私たちの使命が示されています。

この使命は、私たちの唯一の救いの希望、すなわちキリストの死と復活のすばらしい知らせである「永遠の福音」をもって始まっていることに注意してください。その中には、時の終わりを指し示す力強い道しるべとして、「神の裁きの時が来た」とのメッセージも含まれます(黙14：7)。そこにはまた、「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」という招きと、「獣とその像とを拝み」、バビロンに留まる者たちへの恐ろしい警告が続きます。そして最後に、最終時代の神の民が、「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」と描かれます(同7、9、12節)。

**問5 黙示録14：11を読んでください。ここに獣とその像を拝む者たちに休みが無いことについて、どのように描かれていますか。**

獣とその像を拝む者たちには、昼も夜も安らぎ〔休み〕がないということは、彼らには、神に忠実な者たちに与えられる休みが無いということです。

なぜ、三天使の使命の最初の部分は「永遠の福音」と言えるのでしょうか。私たちはなぜ、これらの使命を世に宣言するとき、このすばらしい真理を常に掲げなければならないのでしょうか。休みというものを考える上で、どうして福音の理解が重要なのですか。

幾世紀にもわたって、クリスチャンたちはキリストがおいでになるのを待ってきました。それは事実、私たちのすべての希望の頂点と言えます。そして、それは私たちの希望であるだけでなく、人類史を通して神に忠実であった者たちすべての希望でもありました。

**問6** ヘブライ 11：13～16 を読んでください。ここに、当時のクリスチャンのためはもとより、今の私たちのためでもある、どんな大いなる約束が与えられていますか。

もし、通常世間で言われている死が事実であるなら、これらの聖句は意味を成しません。これらの聖句が語る、「[この人たちは] 約束されたものを手に入れなかった」とは、何を意味するのでしょうか。彼らは死にましたが、今は天でイエスと共に大いなる報いを楽しんでいるというのでしょうか。

だれかが亡くなったとき、私たちはよく、「安らかにお休みください」という言葉を口にしますが、これらの人々は安らかに休んでいるのでしょうか。それとも、天に上げられ、そこで彼らがしたいと思っていた（地上の様子を天から眺めるといった）ことを楽しんでいるのでしょうか。

**問7** イエスは死をどのように表現されましたか（ヨハ 11：11）。

死者が「安らかに」休んでいるという考えは、もちろん、死が何を意味するかについての真理を語っていると言えます。死は確かに休みを意味します。

『もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう。……わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろう』（ヨハネ 8：51、52）。クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、『キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう』（コロサイ 3：4）（『希望への光』1092ページ、『各時代の希望』下巻318ページ）。

イエスは人の死と復活の朝の間の状態を、意識のない眠りにたとえておられます（ヨハ 11：11、14）。しかし彼はまた、救われる者たちと失われる者たちは、復活の後に、彼らの報いを受けることを強調しておられます（ヨハ 5：28、29）。彼は、それがいつ来ようと、死に備えていることの必要を強調しておられます。

あなたは、病気であったあなたの愛する人たちが今休んでいることを知ることによって、どのような慰めを得ますか。

私たちが最もよく使っているスマートフォンのアプリの一つは、グーグルマップです。GPSを使ったこの地図アプリがなかった時代のことを思い出せないほどです。初めての場所に行くには、いつも不安を抱えながら目的地を探していましたが、どんな外国の見知らぬ町にも自信をもって出かけ、道もわかるようになりました。この安心感は、神が与えてくださった預言の予定表によって得られる安心感に似ています。

しかし、私たちは間違った住所を入力してしまうこともありますし、近道を知っているからと言って、アプリの示す指示に従わないこともあります。どちらにせよ、私たちはその結果、どこか見知らぬ場所に行き着いてしまうか、そうでなくても、ほとんど間違いなく心の平安を失うことになるのです。

**問8** パウロはフィリピ4:4~6で、このせわしない、骨の折れる世の中にあって、真の休み、真の平安を得る方法についてどのように語っていますか。

ここでパウロは、いつも、あらゆる試練に直面しているときも喜んでいなさいと言っているのではなく、「主において常に喜びなさい」と言っています。私たちの現在の状況がどうであれ、直面している試練が何であれ、私たちが神の内に、その慈しみ、愛、私たちのための十字架の犠牲の内にいるなら、神にあって喜ぶことができ、私たちの弱った魂に平安が与えられるのです。

この聖句が語りかける語調は、まさしく休みと平和とこの世を超越した希望を、読む者に与えます。

本当に「思い煩うのをやめ」たときに私たちに与えられる魂の安らぎは、どれほどのものでしょうか。これは、この世に生きる者にとっては（おそらく、さまざまな悩みを抱えていたパウロにとっても）難しいことです。しかし、愛の神が究極的にすべてを御手に治め、私たちを神の国に救ってくださると知るとは、私たちが悩むすべてのことに対する正しい視点を与えてくれます。

「主はすぐ近くにおられます」とは、主がいつも私たちの近くにいてくださるといふことであり、私たちが目を閉じ、死の眠りの中に休んだ後、次に目に見える情景はキリストの再臨であるということなのです。

疑いなく、この世は緊張と試練と闘いに満ちています。だれ1人逃れることはできません。紛れもなく使徒パウロでさえその1人でした（2コリ11章）。にもかかわらず、彼は私たちに語りかけます。今、それらの試練を耐え忍ぶなら、私たちがキリストの内に与えられている救いの喜びに憩うことができ、そして事実、この世にあってさえ、魂の休みを得ることができるのです。

フィリピ4:4~6をもう一度読んでください。あなたが今経験している試練や悲しみが何であれ、あなたはこのすばらしいみ言葉をどのようにあなたの人生に適用できるでしょうか。

「私たちはみな、祈りの答えが直接、すぐに与えられることを求める。そして答えが遅れたり、目には見えない形で与えられたりすると失望するのである。しかし神は、私たちの想像をはるかに超えた英知と善意のうちに、常に最善の時に、最善の方法で、私たちの願いに答えてくださる。主は私たちの望むところを超えて、より多く、より良い方法で答えてくださるのである。私たちは神の英知と愛に信頼することができるのであるから、私たちの願いを神に認めていただくよう求めるべきではない。そうではなく、私たちの願いが神のご目的の内に達成されるよう求めるべきである。私たちの望みと関心は、主のみ心の中に消滅させなければならない」(『福音宣伝者』219ページ、英文)。

「イエスがその子らを救い、彼らの体に不死の最後の一筆を入れてくださるまでの時間は、ほんのわずかの間である……。墓は開かれ、死んでいた者たちは出て来て、『死よ、おまえのとげはどこにあるのか。墓よ、おまえの勝利はどこにあるのか』との勝利の叫びを上げる。イエスにあって眠っている私たちの愛する者たちは、不死の衣を身にまとして出て来るのである」(『管理者への勧告』350ページ、英文)。

### 話し合いのための質問

- 1 大争闘の現実について考えてみてください。それが世界に展開しているのがどのようにわかりますか。あなた個人の生活においてはどうですか。それは現実だと感じませんか。事実それは、多くの人々が考えているよりも確かな現実なのです。なぜなら、多くの人々は悪魔の存在を信じないからです。大争闘の現実を理解することは、なぜこの世界の状態を理解する上で、そして、この大争闘がやがて慰めのうちに終わることを理解する上で重要なのでしょうか。
- 2 預言がはっきりと示されていること以上に臆測するとき、私たちは不安になることがあります。教会員であっても、将来を予言しようとしたり、だれかの将来に関する予言を信じたりして、しばしば不安に陥ることがあります。そのような罠に陥らないためにどうすればよいでしょうか。
- 3 クラスで黙示録 14：9～11 を復習してみましょう。獣とその像を礼拝する者たちには休みがないとは、どういう意味でしょうか。
- 4 キリストの再臨の時については、教会の果たすべき役割があるとか、ないとか、しばしば議論されるところです。個人的な見解はさて置き、なぜ私たちアドベンチストが、キリストの再臨使命を宣べ伝えるために積極的にその役割を担うことが、なお重要なのでしょうか。

## 学校での大変な初日

ニーアーン・ムアンにとって、学校の初日は大変でした。とてもとても大変でした。

9歳の彼女は、ミャンマーからアメリカに、1か月前に到着したばかりでした。彼女の両親は難民で、彼女は英語がわかりませんし、友だちも全くいませんでした。「こんにちは。あなたの名前は？」ある女の子が彼女に尋ねました。

ニーアーンは、首を横に振り、「ノー」と答えました。

その女の子は困って、「どこから来たの？」と尋ねました。

ニーアーンは、また首を横に振って、「ノー」と言いました。ニーアーンは失礼なことはしたくありませんでした。ただ英語がわからなかったのです。

英語が全くわからなかったので、午前中、彼女は教室で静かに座っていました。昼食時になると、ほかの生徒の後について食堂に行き、用意されている食べ物を見ました。ナチョチーズとそばろ肉、小さなピザ、チキンナゲット……。それらは彼女にとって初めて見るものでした。彼女が普段食べていたのは、からし菜、じゃがいもの葉、クレソン、茶色の豆、レンズ豆などでした。食後、教室に戻ると、学校が終わるまで静かに座っていました。家に帰ると彼女は、「神様、もう1日、学校で無事に過ごせるように助けてください」と祈りました。……

こうして月日が過ぎ、4年生のときは大変でしたが、5年生になると状況は良くなりました。彼女は英語を話せるようになり、友だちを作り始めました。

「あなたの名前は？」ある女の子が尋ねました。

「ニーアーンよ」と、恥ずかしそうに微笑んで答えました。

「どこから来たの？」と、女の子が尋ねました。

「ビルマから来たの。ミャンマーとも言うわ」と、ニーアーンは言いました。

その女の子はうなずきました。その国について聞いたことがあったからです。何人かのミャンマーからの難民の子どもたちも、その学校で勉強していました。「わかったわ、一緒に遊ぶ？」と、彼女は言いました。

ニーアーンは幸せでした。だんだん学校になじんでいき、7年生のときにはもっと幸せになりました。北アメリカ支部の難民を助けるために集められた2011年の



13回献金のおかげで、アドベンチストの学校へ転校することができたのです。

毎日、彼女は神様に感謝しました。「神様、新しい言葉を学ぶのを助けてくださり、私のことをいつも気にかけてくださって、心から感謝します」